

【優秀賞】テレビ愛媛賞

「障がいは一人の個性」

東温市立重信中学校 1年 村上 七望

私が四歳のとき、私の二人目の弟が生まれました。ある日、父と母は医師から、弟が自閉症であると告げられたそうです。両親はすぐにネットでその障がいについて調べました。名前を呼んでも目が合わないこと、しゃべり始めるのが他の姉弟と比べるとはるかに遅いことなどが当てはまっていたそうです。私が覚えているのは、幼い弟が部屋の隅に座っている姿です。そして、両親が名前を呼ぶと恐れるような顔になっていたこと、興味のあることには一直線に向かっていました。

弟の障がいについて私が知ったのは、約五年前、私が八歳の時でした。私とすぐ下の弟が通っていた幼稚園にその弟は通っていませんでしたので、私が母に尋ねたのです。そのとき初めて、弟に自閉症という障がいがあることを知りました。私の同級生にも、障がいがある子がいるのは知っていましたが、自分の家族に障がいがあるというのは衝撃でした。

弟のことを考えると心配でたまりませんでした。小学校に入ったら、いじめられたり仲間はずれにされたりするかもしれないと落ち込んでしまいました。心配しすぎて、泣いてしまう日もありました。でも、私が弱気でいると、弟が余計な心配をしたり不安な気持ちが強くなったりするかもしれないと思い直しました。私は、もし弟が嫌なことをされたら、全力で守ろうと強く思いました。

あるときふと、他人がいじめに遭っていても、同じように全力で守ろうとできるだろうか、と考えました。私には自信がもてませんでした。自分の身内が辛い思いをしているのは自分も悲しいし耐えられないけれど、他人がいじめら

れているのかばって次のターゲットにされるのは嫌だと思ったからです。いじめは止めたけれど、自分がいじめられるのは嫌だと思ったのです。

しかし、その考えはよくないとももちろん分かっていました。中学校の道徳の授業でも、「傍観者」になってはいけないと学びました。いじめを止めるには、周りにいるたくさんの「傍観者」の力が必要です。「傍観者」がいじめを見過ごすと、いじめは終わらず、エスカレートしてもっとひどい事態になることもあるでしょう。私は、いじめられている人のかばえる人になりたいと思いました。それが弟でも、他人でも関係なく、全力で止めに入り、いじめをなくしたいです。もし自分がいじめられたら、いじめに負けないで、困っていることを誰かに相談したりして、解決したいと思います。

弟のことを考えている中で、「普通」とい言葉に引っかかるようになりました。「普通はできることができない」、とか、「普通の成長ではない」などと、いろいろな場面でこの言葉が出てきます。「普通」「普通じゃない」ってどういうことでしょうか。できることが限られると、勉強や生活に不便を感じることもあるのは仕方ないと思います。でも、できることが限られるのは、だれでも同じではないでしょうか。

自分なりに考えてみると、「普通」とは多数派のことで、「普通じゃない」とは少数派のことを指していると思いました。この社会は、多数派の人が生きやすいように作られていることが多いです。多数派の人はそれが当たり前だと思っているから、少数派の人たちを差別的に見てしまうのだと思います。実際、顔つきや体型、髪型や行動、言葉や肌の色など、多数派でないことを取り上げて、いろいろ嫌な感じで言う人がいます。しかし、数が少ないことは、決して非難されることではありません。数は少なくても、貴重な一人の人間であるということに変わりはありません。でも、「普通じゃない」という言い方をすると、否定的な感じで捉えられると思います。

障がいがある人は、障害のない人に比べて少数派です。障がい者を「普通じゃない人たち」と捉えると、嫌な感じになります。そんな表現をなくせると、障がい者もその家族も、もっと気持ちが楽になると思います。

人間は、一人一人得意なこと、苦手なことが異なります。全て同じ人なんていません。だから、誰かが苦手とすることは私たちがサポートしたらよいし、自分の苦手なことは支えてもらったらいのです。お互いに協力し合えると、みんなが一人の人間として平等に接することができます。私は弟に障がいがあることを知って、考えるきっかけを持ちました。弟は現在小学三年生になり、毎朝「いってきます。」と元気に登校しています。弟には、障がいの有無関係なく多くの人と関わり合って、学校生活を楽しんでほしいと思います。

障がいはその人が偶然もったその人の個性であるということを忘れず、私も周りの人をとにかく大切にしていきたいです。また、「普通」にとらわれすぎず互いの特性を受け入れ、受け入れられる社会にしていきたいです。